羊の夢

亀

蟲を妖怪の一種のような生き物としてとらえたのがユキ・ウルシバラで、それから時は流れ流れてってわけでもないんだけど、そのユキ・ウルシバラが半年くらい前に亡くなった。だからってどうということでもなくて、あたしはちょっとその漫画が好きでその人の葬列にちゃっかり並んだりもしたんだけど、そのとき忌辞を呼んだのが新進気鋭の若手小説家のニイジマという男だった。ニイジマは糞頭がよくて、なんていうかなあ、頭がいいっていうのもあたしみたいな「おべんきょーがとくいでーす」みたいなんじゃなくて、真に教養があって、だから結構その忌辞も面白かったの。でもそれがまた悔しくて、だってあたしそんなこと言えないし、で、ニイジマもその自分の教養をひけらかすような喋り方をするんじゃなくて、淡々と、ただ自然に言葉を選んだらたまたま面白かったみたいな、ああ糞胸糞悪い。あたしは人の葬式に出てこれもどうかと思うんだけど思いっきり棺を蹴っ飛ばしてやりたくなかったけどあたしの大大大好きな（さすがにかなりオーバーな表現だけどさ）ウルシバラには何の罪もないから、そのニイジマって男をちらっと横目で見るだけにした。ニイジマの小説をその後も読んでみたけど、やっぱりあたしにはない発想で、そして、多少その発想があったとしても、あたしがやろうとしていたことをすでにもう全部やっていて、「お前なんかもうアンモナイトみたいなもんだ」みたいな罵倒をされた気分になるし。ただあたしがそのどうにもならない嫉妬心を処理できるほどオトナだったらよかったんだろうなとは思うけれどそんなこともなくて、やっぱり問題もあって、あたしはこのいらいらを抱え過ぎた。いらいらはあたしの部屋のパソコンとかベッドとかクローゼットとかに移っちゃって、あたしは何を見てもそのいらいらを思いだす。だから思い切ってあたしは隣の霞丘市に引っ越して、もう住民票まで移すことにした。ざ、新しい自分。あたしはいつもそうで、付き合ってた彼氏と別れた時は彼氏からもらったものやデートでよく着ていった服を全部近所の小学校の焼却炉までいって中に突っ込んで高笑いしていたらそこら辺にいた小学生から先生呼ばれそうになってあわててフェンス乗り越えて逃げたし、大学の研究室で「ちょっと」なんて助教授に不倫申し込まれそうになったらその助教授の前歯折った後大学に相談して（教務課にストーキングして）無理やり助教授を別の大学に飛ばさせてもらったりしたし。多分、暴力女って言われても文句が言えなくて、あたしの頭の中のほそーい糸がぷちんって言っちゃったらそれまでで、それから先のことはよくわからない、みたいな。所謂「きれやすい子ども」がそのまま体だけ大きくなったんだと思う。で、霞丘市に住民票まで移

しちゃったのだ。さよならニイジマ、さよなら！ ただ、ある意味これは運命的であたしはニイジマとの縁は切れなかった、寧ろ深まってしまった。あたしとニイジマは運命のピアノ線で結ばれているらしくて、そのアパートのすぐ近くの大豪邸にニイジマは住んでいた。一人で住んでいるらしい。女の出入りどころか人の出入りもろくにない家で、一人で。ウルシバラは彼にとってたった一人の友人だったらしく、そこに下世話っていうか週刊なんちゃらみたいな感じで流れた噂もあったらしいけれど、そんなこともなく、ただニイジマは一人でその命を静かに消耗しているのだと、何だよお前頭いいとか思ったけどそんなことないじゃん。沢山ある知識をただ腐らせるとか、それって頭がいい悪いじゃなくてただの整理ができない人間だぜ。ばっかじゃねえの。

でも、あたしは今まで全身全霊で目の前のことから猛ダッシュしていたわけだけど、もうできなくなっちゃったんだ。だって目の前のことから逃げていたはずなのにおしゃかしゃまの手のひらの上のように中指がにゅっと生えていて、逃げたはずの現実が目の前にごろんと横たわっている。ああもう嫌だなあ絶望。さすがのあたしもちょっと考えた。また逃げようかなでも逃げた先には何があるんだろう、ニイジマのいない世界？ ニイジマの影のちらつく世界？ 一度完璧に逃げたのに、その完璧が通じなかった今また更に逃げるとかどうするの、っていうか私はニイジマを怖がっているのいらだっているのどうなの、そして、あたしはぐるぐるの夢の中、たった一つ、息の根を止める瞬間が来てしまった。止めなきゃいけない。いらだちの原因を、今ここで殺す。ごめんね、ニイジマ。かわいいあたしのためにかわいらしく犠牲になって。

ニイジマの豪邸の前であたしは起立の姿勢を取る。せーのっていう掛け声ってしたほうがいいのかな、しない方が雰囲気出るかな、超ドキドキする。こんなの高校の時に好きでもない先輩に告白しろって言われた時以来かもしれない、やだ、あたしったらなんてはしたないというよりろくでもない。ろくでなしはろくでなしのまま、そのまま大きくなってろくでもないことをまたしでかす。じゃあろくでもなくない人間と言うのはどういう人なんだろう。私糞みたいにつまらない人間になるくらいならろくでもない人間である方がいいかもしれない。誰かに愛されながら死んでいくのだ。息をすって、吐くように罵倒する。

「ばーっかじゃねえの」

家の前で叫んだら、さすがにニイジマが出てきた。不機嫌そうな顔であたしを見る。そりゃそうか。初対面のよくわかんねえけど変な奴が家の外で家主を馬鹿にしてんだもんな、不機嫌にもなるわ。あたしはだからって遠慮するような大人しいオンナノコじゃないんだぜ。ニイジマに対して、超サイケデリックにポーズを決めて、とび蹴りを食らわせる。正義の鉄鎚！！ 正義とは何だと言われればよくわからないけど、いつだって自分にあるものだろう、正義って。ニイジマの目がこちらを向く。携帯電話を構えたその手を更に蹴り飛ばす。さようなら、携帯電話。後で見つけてもらえるといいね！

「お前の問題だろう、ニイジマ」「不審者が何を言うんだ」「あたしは逃げるよ」「何だお前」「あたしは逃げるって。あんたが向き合わなきゃ」「はあ？」あたしは余計なことを言わずにここでニイジマの腕時計を壊す。秒針が飛んで行った。ニイジマの顔がこわばる。

大事なものだったらしい。ごめんね。でもあたしあんたをここで倒さなきゃ、ずっといらいらが止まらない。運命的にひきつけられているのあたしたち。ニイジマに掴みかかられそうになる。でもニイジマさんそういうのはむいていらっしゃらないのね、背中がガラ空きよ（↑超かっこいい）、あたしはニイジマにやられながらもやり返してシャイニングウィザードをかける。でもちょっと目標がぶれて首を打ってしまった。ニイジマむせる。ニイジマ弱い。「何の恨みがあって」「恨みはないよ、いらいらするの」「そんな理由で」「でも、あたしあんた倒さなきゃ、ずっとこのいらいらと一緒に眠っているわけにはいかないの」あたしはニイジマをやっぱり殴るし蹴るし踏むし髪の毛を引っ張るし噛みつくし叩きつけるし跳ね上げるし落とすし飛びかかるし、ボロボロに侵食していく。いつだってあたしの正義はあたしにある。だってこれはあたしにとっては正しいもの。ニイジマの家の塀の上に立つと、ニイジマはすごく小さく見えた。そこからニイジマに向かって飛び降りる。ニイジマはころがって避けた。それが精いっぱいなようには見えた。徹底的にやらなければあたしはニイジマの髪の毛を掴みあげる。ニイジマの目は死んでいた。あたしの戦意もぷしゅーと音を立てて消えていく。「もういいよ、気が済んだ」さよならニイジマ、死人と眠れ、なんちゃって（↑やばいかっこいい）。「あ、でもニイジマいいかな？　一言だけ」ニイジマ喋れてない。「お前はアンモナイトなんかじゃないっていって」ニイジマ頑張って口動かそうとする。嫌なのかなーなんなのかなー、わかんないからあたしニイジマのおなかを蹴りあげる。ニイジマはゆっくりと、だけどちゃんと「お前はアンモナイトなんかじゃない」って言ってくれた。

その後ニイジマの小説は読んでない。もう興味がないし、書店で名前を見かけることはするから、彼は彼なりに頑張っているのだろうとは思う。ニイジマはあの後引っ越したらしく、あの家は空き家になった。あたしもあの家に近づかない。やっぱりもう興味ない。いつだって最低な気分だけど、あの頃よりはまだ穏やかに生きている。でも、またあのいらいらの渦の中に閉じ込められてしまったとしたら、きっとあたしは、あの根本から断ち切る甘美な味をおえてしまったあたしは、また同じことを繰り返すのだろう。だっていつだっていらだちは、根本から断ち切らなければならない。あたしの奥に生きたままでは、あたしはいつだって羊のように眠らなくては。